大谷大学図書館所蔵パーリ語貝葉写本「パンニャーサ・ジャータカ」の文献的意義

――『スルーパ・ジャータカ』を中心にして――

吉　元　信　行

1．大谷大学図書館所蔵パーリ語貝葉写本における「パンニャーサ・ジャータカ」

大谷大学図書館に，膨大な量の東南アジア方面から将来された南伝仏教パーリ語貝葉写本（以下〈大谷巴貝葉〉）が，100年近くの間未整理のまま蔵されていることは関係者や一部の日本のパーリ学者にしか知られていなかった。ところが，先般，その目録[①]が完成し，広く内外の学界にも周知されるところとなった（[目録：1995]）。

これらの貝葉写本は，その入手の状況によっておおよそ次の２つのグループに分類することが出来る。

（A）クメール文字貝葉（59套），ビルマ文字貝葉（４套），モン文字貝葉（１套）を含む64套のグループで，100年ほど前にタイ王室から寄贈されたと思われるもの。これらは美しいインド更紗に包まれて，保存状態も大変良く，写本の文字も鮮明である。

（B）ランナー文字貝葉と少数のクメール文字貝葉で，将来経路の全く不明のもの。保存状態も悪く，無造作に保管されていた。後の調査で，タイ北部のチェンマイあたりで書写[②]されたものが誰かの手によって大谷大学に将来されたらしいことがわかった。

本学においては，1996年度より２年間，大谷大学真宗総合研究所「一般研究（共同研究）」により，筆者が研究代表者となって（A）の文献群についての文献的調査を実施し，ほぼその大要を整理し，学会誌及び紀要に報告した[③]。（B）の文献群については，保存状態の悪い上，パーリ語以外の現地語

のかなり混入している写本もある。そのため本学現有スタッフによる研究は困難であり，学外の研究者の参画を待つものである。

［吉元：1999a］で報告したように，（A）には，未だ校訂出版のなされていない，あるいはクメール等の現地文字による出版のみでローマナイズ出版のなされていない稀覯写本もかなり存在することが判明した。その中でも特に注目すべき稀覯写本として従来校訂出版されている「ジャータカ」には含まれないタイ方面に伝承されてきたと思われる「パンニャーサ・ジャータカ」（以下〈Pñj〉）と称される一連のジャータカ群がある。

この〈Pñj〉は15～17世紀頃にチェンマイに住んでいたあるタイ僧が，セイロンでパーリ語を学んで帰国した後，以前から東南アジア方面に現地語で伝わっていたいくつかのジャータカと称される物語をパーリ語で編集したものであるとされる。④ PTS. からテキストが刊行されているが，それは "Zimme Paṇṇāsa"（以下〈ZPṇ〉）と呼ばれるビルマ所伝のものであり，〈大谷巴貝葉〉のものとは含まれるタイトルも内容もかなりの相違が見られる。〈大谷巴貝葉〉の〈Pñj〉は Phuuk 8 から17まで（11は欠）存在する。各ジャータカの次第は［田辺：1981］でタイ方面伝承の〈Pñj〉の前半部分とされるものと一致するので，田辺和子博士の報告するタイ所伝のものと同じ種類の写本であると思われる。以下〈大谷巴貝葉〉中に存在する〈Pñj〉の箇所を田辺報告のジャータカ番号と対応させて表示する。〈ZPṇ〉に対応ジャータカがあれば，その PTS. Edition のジャータカ番号を付す（本表の作成は当科研協力者大上清氏の協力によった）。

〈大谷貝葉〉〈Pñj〉

phuuk	Folio number	田辺：no.	Title	[PTS's no.]
8.	ṇa r. l.1a ～ ṇaṃ r. l.5c.	12.	（前半欠）Dulakapaṇḍita-jātaka	[PTS 2]
	ṇaṃ r. l.1c ～ tū r. l.2a.	13.	Ādita-jātaka	[PTS 1]
	tū r. l.2a ～ thī r. l.3b.	14.	Dukammānika-jātaka	
	thī r. l.3b. ～ 9. da r. l.3b.	15.	Mahāsurasena-jātaka	[PTS 28]
	(thu omit)			
9.	da r. l.3b. ～ 10. dhau v. l.1b.	16.	Suvaṇṇakumāra-jātaka	[PTS 40]

10.	dhau v. l.1b. ~ ni r. l.4c.	17.	Kanakarāja-jātka	
	ni r. l.4c. ~ naṃ. v. l.5c. (naḥ omit)	18.	Viriyapaṇḍita-jātaka	[PTS25]
11.	omit			
12.	ba r. l.1a~ be r. l.4b.	22.	（前半欠）Piṭakattayakatā tividha-sappatti jotana akkhara likkhitta-phalavaṇṇanā	[PTS 43?]
	be r. l.4b. ~ baḥ r.l.4a.	23.	Dhammikapaṇḍita-jātaka	[PTS 8]
	baḥ r.l.4a. ~ bhū r. l.4a.	24.	Cāgadāna-jātaka	[PTS 7]
	bhū r. l.4b. ~ bhau r. l.5b.	25.	Dhammarāja-jātaka	
	bhau r. l.5b ~ 13. mū r. l.2b.	26.	Narajiva-jātaka	[PTS 12]
13.	mū r. l.2b. ~ ya r. l.3c.	27.	Surūpa (rāja) -jātaka	[PTS 13]
	ya r. l.3c. ~ yaḥ v. l.1a.	28.	Mahāpaduma-jātaka	[PTS 27]
	yaḥ v. l.1a ~ 14. lu r. l.4b.	29.	Bhaṇḍātara-jātaka	
14.	lu r. l.4b. ~ lai v. l.4b.	30.	Bahalāgāvī-jātaka	[PTS 33]
	lai v. l.4b. ~ 15. vi v. l.4b.	31.	Setapaṇḍita-jātaka	[PTS 30]
15.	vi v. l.4b ~ vaṃ r. l.1a.	32.	Puppha-jātaka	
	vaṃ r. l.1a ~ sū r. l.4b.	33.	Bārāṇasirā [ja]-jātaka	
	sū r. l.4b. ~ sau v. l.2b.	34.	Brahamaghosarāja-jātaka	[PTS 29]
	sau v. l.2b. ~ 16. hū v. l.5a.	35.	Devarukkhakumāra-jātaka	
16.	hū v. l.5a. ~ ḷā v. l.5c.	36.	Salabha-jātaka	
	ḷā v. l.5c. ~ 17. kyar. l.3b.	37.	Siddhisāra-jātaka	[PTS 48]
17.	kyar. l.3b. ~ kyaḥ r. l.1b.	38.	Narajivakathina-jātaka	
	kyaḥ r. l.1b ~ khyū v. l.5c.	39.	Atitedevarāja-jātaka	

この phuuk 17 の最後に “tetiṃsa-jātaka-samataṃ”（33ジャータカはこれで完了した）と書かれている。〈大谷巴貝葉〉〈Pñj〉では，最初の phuuk7 までと phuuk11 が欠落しているので，この33ジャータカのうち上記25ジャータカ以外の 8 ジャータカが何であったかは特定できないが，［田辺：1981, p. 68］によると，欠落の phuuk11 には，19. Dhammasoṇḍaka-jātaka, 20. Sudassanamahārāja-jātaka, 21. Vajjaṅgulirājasuttavaṇṇanā の 3 ジャータカがあったと推測されるので，当初の欠落前の〈大谷巴貝葉〉〈Pñj〉は，これら28ジャータカ以外にさらに 5 ジャータカを加えた33ジャータカであったと推測できる。

このほか〈大谷巴貝葉〉には，この〈Pñj〉の写本のほかに，phuuk の標題が “Sisora-jātaka” となって，folio no. も ka で始まり kaṃ で終わっている別のジャータカ貝葉写本が存在する。ところが，この Sisora-jātaka は，［田辺：1981, p. 70］によると，タイ所伝の〈Pñj〉の後半部分に含まれ，No. 41に数えられているものである。このジャータカは〈ZPṇ〉にも存在せず，また，タイ所伝の後半部分は現在のところいかなる校訂出版もないので，注目すべきジャータカと言える。[5]

2．〈大谷巴貝葉〉Surūpa-jātaka と〈ZPṇ〉Surūparāja-jātaka の比較対照

まず，〈大谷巴貝葉〉における『パンニャーサジャータカ』の特色を明らかにするため，〈Pñj〉の中で，すでに PTS より校訂出版されている〈ZPṇ〉と〈大谷巴貝葉〉双方に存在するテキストで，さらにサンスクリットや漢訳など諸異本・異訳の存在する “Surūpa-jātaka”（〈ZPṇ〉では “Surūparāja-jātaka” となっている）を取りあげ（［田辺：1984］参照），両者の該当部分を若干対比してみよう。紙幅の都合で，便宜上その冒頭部分の散文と韻文を論文末に付録として対比してあげる（別の機会に本テキストの翻訳を試みるつもりであるので，ここではその翻訳を省略する）。

（論文末付録対照表参照）

この〈大谷巴貝葉〉Surūpa-jātaka を田辺博士将来のマニュスクリプト・コピー（A・B・D写本）[6]と対照してみると，ほぼ同一のテキストであることがわかる。そして，本稿末対照表の如く，本テキストと〈ZPṇ〉のそれを

対照してみると，散文・韻文とも内容的には相似するが，文章そのものにはかなりの相違があることが判明する。

以上の対比の結果，〈大谷巴貝葉〉は，Bangkok National Museum 所蔵のタイに伝わる〈Pñj〉とほぼ同一であり，また，ビルマに伝わる〈ZPṇ〉とは内容的には対応する点が多いが，偈の部分及び散文の表現はかなり異なっており，ずいぶん以前から全く交渉なく別々に伝承されたテキストであることがわかる。すなわち，大谷大学図書館所蔵の「パンニャーサジャータカ」における『スルーパジャータカ』は，PTS 協会より出版されているビルマ伝承の〈ZPṇ〉とは異なったタイ伝承のもので，筆者の管見するかぎり，パーリ原典としてはいかなる刊本も存在しないジャータカであることである。

3．『スルーパジャータカ』の物語概略

〈大谷巴貝葉〉Surūpa-jātaka と〈ZPṇ〉Surūparāja-jātaka の内容的共通部分は次のように要約できる。両テキストのとくに相違する部分のみを下に注記する。

1）むかし，インダパッタという都にスルーパという名前の王がいた。彼にはスンダリーという名の王妃とスンダラ・クマーラという名の王子がいた。スルーパ王はすばらしい「法」を聞くことを熱望していた。

2）このことを知った帝釈天（Sakka）が王を試すため，恐ろしい夜叉（Yakkha）に化けて，王の前に立った。彼は王に，生きた人間の血を提供してくれれば，「法」を説いてあげると言った。

3）スンダリー妃は彼らの話を聞いて，彼女自身を夜叉に差し出すことを申し出た。王は彼女を夜叉に与えたが，夜叉はそれでも満足しなかった。

4）スンダラ王子は彼らの話を聞いて，彼自身を夜叉に差し出すことを申し出た。王は彼を夜叉に与えたが，夜叉はそれでも満足しなかった[*1]。夜叉は王自身を食べたいと言った。王は，先にすばらしい法を説いてくれたならば，その後で間違いなく自らを提供するつもりであると申し出た[*2]。

5）夜叉は4つの偈よりなるすばらしい法を王に教えた[*3]。

6）王は自らを夜叉に差し出した[*4]。

7）夜叉は王を賞賛し，王妃と王子を元通りにして王に返し，天界に帰っていった。

8） その後，王は功徳ある行為を続け，天界に再生した[*5]。

*1 この箇所では，〈ZPṇ〉は韻文と散文で大衆が自分たちも夜叉に食われるのではないかと恐れ，彼らは手を広げて逃げ出したことを記述しているが，〈大谷巴貝葉〉には，その点についての言及はない。

*2 この箇所の〈大谷巴貝葉〉は次のようになっており，この部分に約20行の記述を与えている〈ZPṇ〉より相当短縮されている（〈大谷巴貝葉〉のママ）。

[maṃ r.4] yakkho mahārāja ahaṃ na tappāmi dehe añe santi vatvā / rājā taṃ sutvā attānaṃ dassāmi dhamma desesī ti / yakkho vatvā sādhu mahārājā ti / [maḥ v.1] atha mahāsatto alaṃkata-ratnasihāsayane nīsiditvā so yakkho buddalilāya dhamaṃ desento imaṃ gātham āha /

*3 両者の偈は，写本上の若干の文言の相違はある（〈大谷巴貝葉〉と諸写本の異同については〔吉元：1999a〕：付録参照），にせよ内容は全く同一である。なお，この4偈は，Dhammapada 213, 216, 214, 215とパラレルである。これらの偈は『撰集百縁経』及びAvadānaśataka⑦とも対応する。

pemato jāyate soko pemato jāyate bhayaṃ
pemato vippaputtassa n'atthi soko kuto bhayaṃ /
taṇhāya jāyate soko taṇhāya jāyate bhayaṃ
taṇhāya vippamuttassa n'atthi soko kuto bhayaṃ /
ratiyā jāyate soko ratiyā jāyate bhayaṃ
ratiyā vippaputtassa n'atthi soko kuto bhayaṃ /
kāmato jāyate soko kāmato jāyate bhayaṃ
kāmato vippamuttassa n'atthi soko kuto bhayaṃ /
（[maḥ r.1-5], Cf.〈ZPṇ〉II, p. 84.）
親愛より憂いが生じ，親愛より恐れが生じる。
親愛より離れた人には憂いはない，どうして怖れがあろう。
渇愛より（上と同様）
快楽より（上と同様）
愛欲より（上と同様）

*4 〈大谷巴貝葉〉では，次のようになっている。

[maḥ v.5] so rājā yakkhassa dhammaṃ sutvā pītisomanaso hutvā acchariyabhūto jāto attānañ ca deviñ ca puttañ ca pahāya kheḷapiṇḍaṃ viya attānaṃ [maḥ r.1] yakkhassa adāsi / atha kho mahārājanā acchariyaṃ disvā thuttiṃ akaṃsu / yakkho thutiṃ katvā mahārāja tumhākaṃ deviñ ca puttañ ca passatha kiṃ icchasī ti vatvā rājā icchāmi devā ti vadati / atha sakko dve khattiye sabbālaṅkārapatimaṇḍite alaṅkaritvā bodhisattassa adāsi / bodhisatto tutthamānaso hutvā ahosi / sakko ākāsataruṇasuriyo viya jalamānarūpo aṭṭhāsi /

sakko vatvā mahārāja tumhākaṃ vimaṃsanatthāya idhāgatomhī ti/

上記のように，〈大谷巴貝葉〉では，夜叉は王自身の布施を賞賛し，王妃と王子を返してほしいかと王に尋ね，返してほしいと応えた王に二人を元通りにした後，自らの身分を明かし，天に帰ったこと簡略に記している。

しかし，〈ZPṇ〉では，夜叉は「大王よ，あなたは将来必ず仏陀になるであろう仏陀の芽（Buddhaṅkura）である」と賞賛し，身分を明かした上で二人を元通りにして返したことになっている。この "Buddhaṅkura" という概念は，Nidāna-kathā（J.I.16）などの大乗的影響を受けたアッタカター文献の影響であろう。そして，この部分は2偈を含む18行にわたる長文になっている。

*5　〈ZPṇ〉は次の記述を追加する。

「大衆も天界に生まれた。」

4．むすび

周知のごとく，『スルーパジャータカ』には様々な異なったヴァージョンの物語が各地に伝承されている。田辺博士によると，Avadānaśataka, Mahāvastu,『賢愚経』,『撰集百縁経』などの経典や中央アジアの窟院壁画などの仏教美術の素材になっていることが指摘されている。[8] これ以外にも，人名が異なるのみで，ほぼ同じ内容の物語が，スリランカ伝承の Rasavāhinī 中の Dhammasoṇḍaka-vatthu に認められる。[9] 田辺博士が指摘するように，ここに問題とした〈ZPṇ〉の Surūparāja-jātaka は，これらのヴァージョンの中で Avadānaśataka,『撰集百縁経』など説一切有部系資料のストーリーに比較的近いと言える。そして，〈大谷巴貝葉〉及び Bangkok National Museum 所蔵の写本（タイ伝承〈Pñj〉）も〈ZPṇ〉と同じ系列に属する。しかし，上記の検討のように，両者は内容的にも微妙な違いが見られ，しかも，その文言・文章表現には大きな相違・増広が見られたのである。すなわち，タイ伝承〈Pñj〉に比べて，〈ZPṇ〉は大きく増広されており，偈も整備され，パーリ語としても比較的文法・用語面で洗練されている。しかし，〈大谷巴貝葉〉を含めて〈Pñj〉の方は文章的にも短く，文法・用語面でも稚拙さが認められる。しかも後半部分がかなり簡略化されているのである。

これらの点からすると，両伝承は作成初期の段階，しかも口承伝承の段階で分かれ，それ以降両者の交渉はなく，それぞれ独自に伝承されたものと思われる。ところが，〈ZPṇ〉の伝承では，かなり整備され，大きく増広され

ている。しかも“Buddhaṅkura”の概念を加えたり，大衆の生天の点などを加えたりして，かなり脚色されていると思われるところも認められる。そういう観点からすると，タイ伝承〈Pñj〉の方が「パンニャーサジャータカ」の原型に近いのではないかということが出来る。

その意味で，完全な刊本も存在せず，特に後半部分の方はタイ現地でも写本のみしか存在せず，その数や名前や内容の点でも不明な点の多いタイ伝承「パンニャーサジャータカ」のかなりの部分で，保存状態も良く，鮮明な写本を蔵する大谷大学図書館所蔵のパーリ語貝葉写本の存在意義は大きいということが出来る。

現在我々は，平成10年度から12年度にわたり文部省科学研究費により「大谷大学所蔵パーリ語貝葉写本 Paññāsajātaka の文献的研究」を進めており，本稿では『スルーパジャータカ』を取り上げたが，今後，その他のジャータカについても上記のような検討を加えていく所存である。

（本稿は平成10年度文部省科学研究費〈基盤研究Ｂ〉による研究成果の一部である。本稿の要旨について，去る1999年８月26日，スイス・ローザンヌで開催された国際仏教学会において英文により口頭発表した。）

註

① この目録に対して，海外の学界では早速次の３編の書評・紹介がなされた。(1) K.R. Norman, Buddhist Studies Review, Vol.14, No.1 (1997), pp. 63-64 ; (2) Fragile Palm Leaves. Fragile Palm Leaves, No. 2 (October 1997) pp. 4-5 ; (3) Frimoz Pecenko, Indo-Iranian Journal 41, pp. 301-304. なお，これらの書評については舟橋智哉氏によって翻訳紹介されている（[吉元：1999a]）。

② [目録：1995]解説（p. xlvi）参照。

③ [吉元・長崎：1997] [吉元：1999a] 参照。

④ [田辺：1980] 参照，Cf. K.R. Norman, Pāli Literature, including the canonical literature in Prakrit and Sanskrit of all the Hīnayāna schools of Buddhism, A History of Indian Literature, pp. 177-179.

⑤ この Sisora-jātaka については，大上清氏が平成８年度大谷大学大学院文学研究科修士論文として，そのローマナイズと仮訳を提出した。その概略は [吉元：1999a] に紹介されている。

⑥ 筆者は田辺博士のご厚意によりこれら写本を参照することができた。[田辺:1981] p. 66 にこれら写本の説明有り。

⑦ [田辺：1981] p. 1063参照。

⑧ [田辺：1984] 参照。

⑨ Cf. Sharada Gandhi : Rasavāhinī, A Stream of Sentiments, Deli : Parimal Pub., 1989.

参考文献

［目録：1995］　大谷大学図書館編『大谷大学図書館所蔵貝葉写本目録』大谷大学図書館・1995年

［田辺：1980］　田辺和子「Paññāsa-jātaka 中の Suddhana-jātaka について」印度学仏教学研究28―2

［田辺：1981］　田辺和子「タイに伝わる『パンニャーサジャータカ』（50ジャータカ）」仏教学11号（1981年）

［田辺：1984］　田辺和子「paññāsa-jātaka 中の Surūparāja-jātaka について」印度学仏教学研究32―2

［吉元：1999a］　吉元信行「大谷大学図書館所蔵パーリ語貝葉写本の文献的研究」大谷大学真宗総合研究所紀要16号（1999年）

［吉元・長崎：1997］　吉元信行・長崎法潤「大谷大学図書館所蔵パーリ語貝葉写本について」印度学仏教学研究45―2

〈ZPṇ〉　Paññāsa-jātaka or Zimme Paṇṇāsa (in the Burmese Recension), Ed. by Padmanabh S. Jaini, 2 Vols., PTS, 1981, 1983.

「パンニャーサジャータカ」の各種伝承に関する歴史的・体系的研究として次のような研究論文及び学位論文がある。

Padmanabh S. Jaini, “The Apocryphal Jātakas of Southeast Asian Buddhism”, The Indian Journal of Buddhist Studies, Vol.1, No. 1, pp. 22-39.

Dorothy H. Fickle, An Historical and Structural Study of the Paññāsa Jātaka, A Dissertation in Oriental Studies, Presented to the Graduate Faculty of the Univerisity of Pennsylvania in Partial Fulfillment of the requirements for the Degree of Doctor of Philosophy, 1978.

Ginette Terral-Martini, “Les Jātaka et la litterature de l’Indochine bouddhique” in *Présence du bouddhisme* (special issue of *France Asie, Revue mensuelle de culture et de culture et de synthèse*, tome xvi), pp. 483-492.

（本学教授・仏教学）

付録

〈Otani〉 Surūpajātaka	〈Zimme〉 Surūparājajātaka
[mū r. l.2]	[p. 177]
paricayā[1] jalaṭenu[2] sannibhan ti idaṃ satthā jetavane viharanto attano dāna-pāramiyo ārabbha karethasi[3] / ath'eka-divasaṃ bhikkhū dhamma-sabhāyaṃ kathaṃ samuṭṭhapesuṃ/ āvuso aho vata satthā dānena atito[4] ti kathaṃ nāma cakkhulikaṃ[5] brāhmaṇaṃ khaṇena pabbajjitva[6] khippam eva arahattaṃ adāsī ti buddhaguṇ ṇaṃ vaṇṇayantā nisidiṃsu[7] /	marici viyā ti idaṃ satthā jetavane viharanto attano dāna-pāramim ārabbha kathesi/ ekadivasaṃ hi bhikkhū dhammasabhāyaṃ sannisinnā kathaṃ samuṭṭhāpesuṃ : aho vata amhākaṃ satthā dānena atitto, idāni paresaṃ vimuttisukhaṃ dadanto mahākāruṇiko yeva hotī ti/
atha bhagavā tesaṃ katha[8] sutvā sihasayanato[9] vuṭṭhāya dhamma-sabhāyaṃ āgantvā pavaradhammāsane nisiditvā[10] kāya nu'ttha bhikkhave etarahi kathāya sannisinnā ti pucchitvā imāya nāmā ti vutte [mū v. l.1] anacchiriyaṃ[11] bhikkhave buddhabhāve ṭṭhito ahaṃ pana pubbe pi puthujanakāle puttañ ca bhiriyañ ca attānañ ca dhamma-ssavaṇatthāya adāsi yevā ti vatvā tuṇhi ahosi/	satthā pana gandhakuṭiyaṃ vasanto kathaṃ sutvā dhammasabhāya sālāyam āgantvā tatth' eva paññattavarabuddhāsane nisīditvā kāya nu'ttha bhikkhave etarahi kathāya sannisinnā ti pucchitvā imāya nāmā ti vutte na bhikkhave idān' eva mayhaṃ buddhabhāve ṭhitassa paresaṃ vimuttisukhaṃ dānaṃ tumhākaṃ acchariyaṃ hoti, ahaṃ pubbe pi bodhisattakāle puthujjanabhāve ṭhito attano bhariyañ ca puttañ ca attānañ ca dadanto parassa santike dhammasavanatthāya adāsi yevā ti vatvā tuṇhī ahosi/ tehi yācito attītam āhari/
tehi yācito atitaṃ[12] āhari/	
atite[13] bhikkhave indapatthanagare surūpo nāma rājā rajjaṃ kāresi/ so rājā dhammiko issaro silasampanno[14]	atīte bhikkhave indapatthanagare surūpo nāma rājā rajjaṃ kāresi/ so pana rājā sīlasampanno dasarājadhammehi ca sampanno bhonto sakala-indapattha-nagare vasantānam amhākaṃ sāmiko ayam eva rājā dhammiko rājā yeva hotī ti nagarehi vuttavacanena pākaṭo hoti/
ekā aggamahesī sundarī nāma devī ahosi/ tassa putto sundarakumāro nāma ahosi/ ekadivasaṃ uparipāsāda-varagato siha[15] -sayanato vuṭṭhāya	tass' eva rañño piyabhariyā aggamahesī devī sundarī nāma ahosi/ tassa putto sundarakumāro nāma ahosi/ ekadivasaṃ hi so rājā uttaripāsādavaragato sirisayana-

paccusakāle sariraṃ niccaṃ viditvā pathamaṃ gātham āha/

mariccamāyā[16] jalaṭena[17] sanibhaṃ/
kaddhali[18] asāraṃ
bahudukkhasañjannaṃ//
golayaṃ[19] garahitaṃ paṇitehi[20] /
supinaṃ va kāyo idaṃ padissati//

phalāni-m-iva pakkāni niccaṃ
pattanato ayaṃ[21] /
evaṃ jātānaṃ maccānaṃ niccaṃ
maraṇato [me r.1] ayaṃ[22] //*
accantim[23] ahorattā jivitaṃ[24]
uparicajji[25] /

āyu khayati maccānaṃ kunnanadi
va udakaṃ//

pīṭhe nippanno paccūsakāle vuṭṭhāya pallaṅke nisīditvā attano sarīre c'eva aniccabhāvaṃ disvā attanā saddhiṃ sallapento imaṃ paṭhammaṃ gātham āha/
(p.178)

1. marici viya mhāyuttaṃ jale ca
phenupamaṃ/
kaddali va asārañ ca bahudukkhehi
saṃyuttaṃ//
2. asuciyā sañchannaṃ rogaṭṭhānañ ca
sabbadā/
sarīram aniccaṃ c'evajja mayhaṃ
patissatī ti//

evañ ca pana vatvā attanā saddhiṃ sallapitvā surūpo nāma rājā attano cittena puna pākaṭakaraṇattāya upamaṃ saṃsandanaṃ karonto gāthāyo āha/

3. yathā pakkaṃ rukkhaphalaṃ niccaṃ
patati bhūmiyaṃ/
tathā jātānaṃ maccānaṃ niccaṃ
patati maraṇaṃ//
4. yathā rukkhe ṭhitaṃ phalaṃ apakkaṃ
saṇṭhitaṃ hoti//
tathā jaram apatvā va sattanam/
ayu tiṭṭhati//
5. yathā c'eva kunnadiyā sandamānañ
ca udakaṃ/
aniccam appatiṭṭhitaṃ khippaṃ
ve gacchati khayaṃ//
6. tathā c'eva loke mato macco
nissāya jīvataṃ/
anicco va khandhabhedā khayaṃ
gacchati āyuno//
7. yathā c'eva kunnadiyā sandamānañ
ca udakaṃ/
apatvā va khayaṃ jāti tathā macco

	loke jāto/
	apatvā va jaraṃ matam āyuṃ
	nissāya jīvitaṃ//
	8. yathā ṭhitā ussā-bindu tiṇagge
ussāva bindatiṇṇam [26] hi	patitā khippaṃ/
suriyaggamanaṃ [27] pati/	sūriyuggamane kāle evam
evaṃ āyumanussānaṃ khippa- [28]	āyu manussānaṃ/
apataraṃ [29] gato ti/	maraṇuppādake kāle khippam
	eva patitā siyā ti//

※ 〉〉は大谷大学将来以前に誰かによってペンで書き直された修正を示す。

※ A，B，Dは田辺博士将来の写本フィルム（〔田辺：1980〕p. 99参照）を示す。

1 〉〉 mariciyā, A.B.D. mariccamāyā
2 〉〉 jalaphenu ; A. jalaphena, B. jalatena, D. jālaṭena
3 A.B.D. kathesi
4 B.D. atitto
5 〉〉 makkhalikaṃ
6 A. pabbajitvā
7 B.D. nisīdiṃsu
8 〉〉 kathaṃ, A.B.D. kathaṃ
9 B. sīha-
10 B.D. nisīditvā
11 A.B.D. anacchariyaṃ
12 B.D. atītaṃ
13 B.D. atīte
14 D. sīla-
15 B. sīha-
16 〉〉 maricciyā
17 〉〉 jalaphenu ; A. jalaphena
18 A.D. kaddali
19 〉〉 rogālayaṃ (?)
20 paṇḍitehi
21 A. bhayaṃ
22 A. bhayaṃ
23 A. accanta
24 B. jīvitaṃ
25 A. upariccaji
26 B. bindutiṃam ; D. bindhutiṇṇamam
27 D. suriyuggamanaṃ
28 D. khippaṃ
29 B. appataraṃ

＊ この偈は Sn. 576 とパラレルである。

phalānam iva pakkānaṃ pāto papatanā bhayaṃ,
evaṃ jātānaṃ maccānaṃ niccaṃ maraṇato bhayaṃ.